

炎の色

近藤啓太郎



炎の色

近藤啓太郎



炎の色

校印廃止
©一九八一

定価一〇〇〇円

昭和五十六年七月十日印刷
昭和五十六年七月二十日発行

著者 近藤啓太郎

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七
振替東京二二三四

炎 の 色

装
幀
黒
川
彬
子

一章

邦男が起きる気配で、蘭子は眼をさました。うす眼をあけて見ると、邦男は上半身を起こして、「一、二、三」とかすかに声を出しながら、寢床の上で屈伸運動をくり返していた。たぶん、六時だろう。そう思ったが、蘭子は一応、訊いてみた。

「いま何時？」

「六時。起こしちゃって、悪かったね。ごめんよ」

と邦男は蘭子に言ってから、立って部屋を出て行った。

蘭子は寢返りを打って、ふたたびうとうとしはじめた。朝の仕事は邦男の役目で、結婚以来のことである。長年のことなので、邦男はきまった順序でまちがいなく仕事を片付けた。で、蘭子は朝のひとつき、仮眠の快さを愉しむのであった。

邦男は浴室へ行って洗濯機のスイッチを入れ、次に台所の炊飯器に点火してから、庭の畠を見まわった。六時起床が多かったが、畠仕事に時間がかかる場合は五時のときもあった。畠仕事が終わると、今度は洗濯物を裏庭へ干しに行ってから、掃除にとりかかった。邦男は毎朝、判で押したように働いていた。

邦男は早起きなので、自然に働いているにすぎない。新婚当初、蘭子は恐縮したが、邦男はじつとしていられない性質だと言った。好きでやっていることだから気にしないでくれと言うのであった。

蘭子が掃除機の音をかすかに耳にしながら、朝の仮眠を愉しんでいると、邦男が戸を開けて声をかけた。

「七時だよ」

「どうもありがとう」

邦男は戸を閉めて、今度は澄之を起こしに行った。蘭子が起きて部屋を出ると、入れ替りに邦男がもどってきて、寝具を押入に片付けはじめた。

蘭子は着替えをすますとダイニングキッチンへ行った。リビングルームでテレビを見ていた小学校四年の澄之が、「お母さん、おはよう」と立ち上ってきた。背広に着替えてきた邦男は鞆と葉書をリビングルームのテーブルに置いてから、食卓に着いた。蘭子は味噌汁を椀につぎながら、澄之に話しかけた。

「澄之は今日、お友達と釣りに行くって言ってたわね」

「こないだフナを釣った川へ、また行くんだ」

「川へ落ちないように、気をつけなさいよ」

「大丈夫だよ。馴れてるもの」

「だけどさ、川はあぶないから、用心の上に用心しろよ」

と今度は邦男が心配して言った。

「川だけじゃなく、往復の道路にも気をつけるんだよ。交通事故はこわいからな。それから……」

「わかってるよ」

と澄之はうるさそうに言った。

「わかってるわよねえ」

と蘭子は澄之に信頼を示すことによって、邦男の口を封じた。

蘭子にしても川遊びは心配だから、もっと注意したい。が、注意しすぎると、子供はうるさがつて何も聞こうとせず、逆効果になった。

蘭子は今日から学校へ出勤だが、澄之は始業式まで春休みのつづきである。邦男は市役所に勤めているので共稼ぎの家庭であり、澄之はいわゆる鍵っ子であった。

「本家では、秀作が百姓をつぐ約束で、オートバイを買ってやることにしたんだってさ」

と邦男が味噌汁をすすってから蘭子に言った。

「馬鹿ね。今度はスポーツカーを買ってくれなければ跡をつがないって、ごね出すにきまつてるわ」

「きつと、そうだよな。兄貴が甘すぎるから、秀作の奴、図にのって不良みたいになっちゃうんだ。高校生のくせに、髪の毛を肩までのぼしたりしてさ」

「澄之」

と蘭子は気がついて言った。

「本家のお兄ちゃんがオートバイに乗せてやるって言っても、絶対に乗っちゃあ、駄目よ。いいわね」

「ほんとだ」

と邦男も澄之をふり向いた。

「高校生のオートバイほど、事故の多いものはないからな」

「ぼく、乗らないよ」

「あぶないことだけは、しないでくれよな。大勢の子供なら一人くらい死んでもあきらめがつくけど、澄之は大事な一人っ子だからね」

「そんなこと、よそでは言わない方がいいわよ」

と蘭子はやりわりとした口調で邦男をたしなめた。

「大勢の子供なら大事じゃないのか、人の生命の尊さはみんな同じだって言って、怒る人がいるわ」

「でも、それは建前じゃないのか。誰が考えたって、ほんとには一人っ子の方が大事だよ」

「実際はそうかもしれないけど、大勢の子供を持った親が聞いたら、一人くらい死んでもいいとは何事かって、怒り出すにきまつてるわ。そう言われたとき、あなた、なんて答えるの」

「なるほど。そう言われてみれば、そうだな……」

と邦男は困惑した末、神妙な顔になって頷き返した。

邦男の顔を見る澄之の眼に、軽蔑の色がうかんだ。母親にやりこめられた父親として、澄之の眼に映ったのであろう。蘭子は後悔を感じたが、いまだ邦男を立てる発言を試みても無駄だと思った。子供というものは意外に本物を見分ける能力を持っていて、言葉ではごまかせないものであった。

数日前の夕方、澄之は近所の中学生にからかわれて、家へ帰ってくると両親に訴えた。

「うちのお父さんはお母さんに頭が上らないから、朝早く起きて働くんだって言うんだよ。お母さんはかかあ天下で、お父さんはだらしないって、笑って馬鹿にするんだ」

邦男は返答に困るばかりで、いつまでも黙りこんでいた。止むを得ず、蘭子が澄之に言った。

「お父さんはやさしい人だから、女のお母さんをいたわって、朝早く起きて働いてくれるのよ。」

お父さんみたいにはんとに強い男の人って、弱い人にやさしいものだわ。女にいばる男なんて、

ほんとと男らしくないのよ」

「ほんと？」

「ほんとよ。お父さんみたいな人こそ、気はやさしくて力持ちって言ってね、ほんとに男らしいのよ」

澄之は納得して、ちょっと見直すような顔で邦男を眺めた。が、その反面、黙りこんでいるよりほか能のない父親と、適切な発言をする母親との相違を、敏感に感じているのであった。

邦男は中肉中背の好男子で、気がやさしくて力持ちの点に嘘はなかったが、見かけとちがって頭が悪かった。名のない私大をどうやら落第せずに卒業したのが取柄で、小国市役所に二十年近く勤めていたが、まだ課長になれない。が、邦男は自己の能力を知っている男で、愚痴や不平を言わず、軀を惜しみなく使って働いていた。邦男は鈍重だが、几帳面で実直な男であった。

邦男は分家するとき、財産分けとして、本家の裏地の雑木林を整地した三百坪の土地に、三十坪の家を建ててもらった。当時は坪一万円もしなかった土地が、その後、附近の道路拡張や市役所の新築移転などで鰻上りになって、今では五十万円もするのだから、邦男は財産家と言っている。一方、一町歩余りの土地を持つ本家は大変な財産家になったわけだが、邦男は大学を卒業してもらった上での財産分けなので、文句は一切言わなかった。生活が安定している上に、才色兼備の妻と健康な子供にめぐまれているのだから、邦男はこの上なく幸福を感じていた。この幸福な生活が永遠につづくことを、邦男は心からねがっていた。

蘭子は小国市の八百屋の娘だが、高校で勉強も運動も拔群だったので、東大を受験した。一次試験には合格したが、二次試験で落ちた。四年制の私大進学は家庭の経済が許さなかったので、蘭子は好きなスポーツの道を選び、女子短大の体育科に入学したのであった。

蘭子は在学中、私大のテニス部のキャプテンと恋愛関係に陥ったが、相手は卒業後アメリカへ留学すると梨の礫になった。蘭子はいささか自暴自棄になって乱れたものの、やがて立ち直って成績優秀で卒業すると、小国市の中学校教員になった。

教員生活四年目に邦男との縁談があると、蘭子は身分相応と考えて結婚にふみ切った。今や結婚生活十二年、蘭子は三十五歳、邦男は四十二歳であった。

蘭子は邦男に夫婦の絆は感じていたが、魅力は全く感じていなかった。昔は鈍重な邦男に苛々としたが、今では憐憫の情を感じていた。承知の上で夢のない結婚生活に入ったのだから、いままさに不満を言えた義理ではない。とは思うものの、面白味のない毎日なので、蘭子は謀反をたくらまないでもなかった。

食事が終ると、邦男はリビングルームへ行き、テーブルに置いた二枚の葉書を手に取って見直した。テレビ懸賞の回答葉書で、邦男は年中応募していた。邦男の唯一の趣味と言ってよかった。蘭子は食事の後片付をすますと、邦男の傍らに腰かけてひと休みした。邦男が葉書の回答を見てもらいたような顔でふり向くと、蘭子は冷たく一瞥してから、素知らぬ顔をした。軽蔑感が胸にわだかまったので、蘭子は気分転換を求めて澄之に言った。

「夕ごはん、何にしようか。たまには、澄之の好きなすき焼でもおごるか」

「賛成」

「じゃ、学校の帰りに、すき焼の材料を買ってくるから、楽しみに待っていて」

と蘭子は立って、出勤の支度をはじめた。

邦男は鞆をかかえて、ひと足先に玄関へ行った。蘭子は中学校まで自動車で二十分だが、邦男は市役所まで自転車です十分もかからない。邦男は毎日、三十分も早く出勤しないと、気がすまなかった。

徐行運転で蘭子は校庭を横切り、駐車場へ行った。車を下りると、蘭子は校舎にそって玄関へむかった。

校舎は不気味なくらいにしずまり返っていて、廃墟を思わせた。生徒のいない校舎は、仮死状態と言つてよかった。青空の下、校舎は不安定に傾いて見えた。

蘭子が職員室に入つて間もなく、ベルが鳴つて職員会議がはじまった。前沢校長が本年度の経営方針を話した後、小寺教頭を中心に多くの打合せが行われた。最後に、本年度の学年主任と学級担任及び副担任の発表があった。

席のかわる教員は机上や引出の私物をまとめて、職員室内を移動した。次には、学年職員室の

入れ替えなので、蘭子は三階へ行った。三学年職員室から二階の二学年職員室へ荷物を運びこむと、蘭子はひと息ついた。蘭子と主任の青崎以外は一年からの持ち上りの学級担任なので、一階から荷物を運びこんでいた。

蘭子は前年度、三年の学級担任だったので、今年は一年と思っていたのだが、先月末、教頭に呼ばれて校長室へ行った。

「教頭先生と相談した結果、米長先生には新学期、二年を受け持ってもらうよ」

と前沢校長は笑顔で言った。

「今度の二年は問題児が多くて大変なようだから、どうしても米長先生が必要なんだ。二年の若い女の先生方を指導してもらいたい。わたしも教頭先生もたよりにしてるから、ひとつたのむよ」

「頑張りますけど、あんまりいかぶらないで下さい」

と蘭子は笑って、校長室を出た。

校長が言った通り、今度の二年には問題児が多かった。新しい学級担任になるときは、期待と不安が適度に入りまじるものだが、今回に限って蘭子は不安感の方が大きかった。正直言って、問題児の担任にはなりたくない。問題児の担任になると、想像以上に心身の苦労が大きくて、ノイローゼになる教員も少くなかった。

学年職員室の整理が終ると、学年主任の青崎が前年度の学年主任だった鈴木を呼びに行った。

みんなは鈴木の話をはじめた。

「鈴木先生は今年もまた、一年の主任になったけど、彼女の家から学校まで通勤が大変なので、来年は転勤するらしいんだ。それで、三年まで持ち上げないから、下りたっていう話だよ」

「それもあるけど、この学年は問題児が多いから、逃げたんじゃないの。彼女は利口だからね」

「問題児よりも、問題ママに恐れをなしたんじゃないのか」

「問題ママはこの学年に限らないよ。一億総ママゴン時代だもの」

「それも、そうだ」

と言って、みんな笑った。

噂の鈴木絹子は学芸大卒の四十一歳で、見るからに理智的な顔をしていた。頭は切れて、仕事にそつはなかったが、人柄が冷たかった。

鈴木にかわって主任になった青崎年男は三十九歳で、やはり学芸大卒だが、仕事熱心な上に温和でユーモアがあった。学級担任から歓迎されていたが、蘭子もまた、鈴木より青崎の方が好きであった。

青崎の案内で、鈴木は職員室に入ってくると、簡単な挨拶を行った。

「今回、新学期にあたり、成績、行動、その他、すべての面を考慮して、学級再編成を行いました。その際は、今ここにいらっしゃる持ち上り担任の先生方には大変ご協力いただきまして、ありがとうございました。おかげさまで、公平な再編成が出来たと思います。では、青崎先生、何

分ともよろしくおねがい申し上げます」

鈴木は脇にかかえた書類を青崎に渡すと、会釈して職員室を出て行った。青崎は生徒名簿の入った封筒を一組から七組まで順に机上に並べると、籤引を作った。担任たちは籤を引いて関係書類を受け取ると、席へ戻ってさっそく生徒名簿を出して見た。

「わあ、問題児の花井マミはうちの組だわ。米長先生、助けて」

と隣席の松野由紀が蘭子にむかって、大袈裟に助けを求めた。

「野中孝治はまたぼくの組だ」

と今度は男子教員がうんざりとした顔で言った。

「うちのクラスには、これといった問題児はいないけど、うるさがたの母親が多くて参ったな。」

山根君をいびったおばさんもいるよ」

「ぼくの組にも、山根君をいびった片割がいるよ。その上、問題児もいる。ぼくこそ、参ったよ」

「わたしのクラスには、監視ママがいるわ。厭になるわね」

と言って、背後の窓をふり向く女子教員がいた。

校庭の向う側には、団地の建物がそびえ立っていた。「エメラルドハイツ」と言って、西玉中学校の生徒の六割が住んでいるマンモス団地である。

エメラルドハイツには十二階建と九階建の二種類のマンションがあつて、前者は4LDKで高

級サラリーマン、大学教授、医師などが多く、後者は3LDKで中級サラリーマンが多かった。

西玉中学校には学力優秀な生徒が少くなかったが、教育熱心がすぎて異常な母親もまた多かった。マンションから望遠鏡で学校を監視して、文句を言ってくる母親がいた。

去年の春、蘭子が生徒をはだしにして、校庭で運動させていると、たちまち文句の電話がかかってきた。

「はだして運動させている以上、校庭の土の黴菌の検査はしたんでしょね」

「いえ、そんな検査はしません」

「とんでもない。もし破傷風にかかって、死んだらどうしますか」

「不慮の災難と考えるよりほか仕方ありませんね」

「何を言うんですか。校長を出しなさい」

蘭子は校長室へ行って、事情を説明した。前沢校長は電話に出ると、落着いた態度でからかい半分に応対した。

「体育の時間、はだして校庭を走らせる以上、土砂の中の黴菌の検査をせよとのことですが、黴菌は土砂だけではなく、空気中にも存在します。従って、黴菌を恐れるならば、学校中の空気も検査しなければなりません。しかし、空気中に黴菌がいるとわかっても、学校を閉鎖するわけにはいきませんが、お子さんに防毒マスクでもかぶらせて、登校させますか。生徒にはだして土を踏ませることは、自然に親しませると同時に抵抗力を養う意味もあって、大変にいいことなんで